

21世紀の現在求められることは、本誌のタイトルのとおり、「協同の発見」と「協同の解明」であろう。失われ、否定されつつある「協同の復権」がいま求められる。

今日のような弱肉強食の時代において、「自助自律」や「自己責任」が強調される一方、「協同」は虚構であり、「組合」は過去のもののみなされる風潮が強まっている。「協同」よりも「競争」が、「他者」よりも「自己」が、「未来」よりも「現在」がより重要視され、「協同組合」も時代に適合しえない「遺物」としてとらえられてきている。協同組合は、もはや「協同組合」である必要はなく、協同組合の「脱協同組合化」あるいは「会社化」の方がより時代適格的であるという風潮も強まっている。

### 求められる協同の根源

このような協同組合の分岐点において、われわれには今一度、人間にとって「協同」とは何か、それは必要不可欠なものなのか、その「協同」が成立・発展するための条件は何か、エゴイストである人間は協同することができるのか、協同の利点は何か、協同の問題点は何か、競争と協同の関係はどういうものか、協同のメカニズムはどのようなものか、といった「協同」について根源的な検討が求められている。

これまでの協同組合研究においては、「農業協同組合」・「生活協同組合」・「労働者協同組合」における部門としての「農業」・「生活」・「労働」について取り上げられてきた。例えば、生命産業や環境保全としての農業の役割、総体としての生活経済・安全安心の食生活、自営業でも雇用労働でもない協同労働の役割などがさまざまな研究分野において深められてきた。また「協同組合」のうちの組織論としての「組合」についての研究成果も枚挙にいとまがないほどである。しかしながら意外にも、それら「協同組合」のうちの「協同」それ自体に関しては、これまでの協同組合研究において十分に解明されてきたということができない。

そこでいま協同の発見とその解明を試みたい。ここでは、利己主義と利他主義の問題、目的としての協同と手段としての協同、協同のメリットとコスト、協同の根本的な特質の4点について言及する。

## 利己主義と利他主義の間

協同は利他主義の立場から説明される場合がある。利己主義を否定し、利他主義に立つところに協同があるというのである。いかにも協同は利他という厳しさの上に成り立つようである。しかし、現実的には人は利己的であるとともに利他的でもある。利己主義と利他主義との間にさまざまなバリエーションがあり、究極的には利己主義ではあっても利他主義をも追求することがあるのが人である。「情けは人のためならず」とは他者への配慮(利他)は結局自分の利益につながるものであるということである。「徳を積む」のは自己の幸福や天国を求めるからである。すなわち人は利己的であるとともに利他的でもあり、むしろそこに現実的な協同の可能性がある。利己と利他の関係、そこにおける協同の根拠を解明することが求められるのである。

## 目的としての協同と手段としての協同

協同には目的としての協同と、手段としての協同がある。この二つの協同の区別と関連を解明することが必要である。

目的としての協同は、協同それ自体が目的となるものであり、協同それ自体を求めるものである。それは人間の欲求のひとつであり、人間の安心感や協調感を実現することである。

手段としての協同は、ある目的を協同して実現することであり、目的実現のための手段としての協同である。協同以外の手段によってその目的を実現することができるならば、手段としての協同をとることはなく、その場合協同とは異質の方法が手段となりうる。手段としての協同はその意味で、相対的なものであり、他の手段に転換されやすい。

しかし手段としての協同をとることにより、その目的を実現すること以外の効果を発揮することがある。手段としての協同を実行するなかで、協同それ自体の効果を発揮することがある。

目的としての協同と手段としての協同は、協同のあり方の二つのあり方ではあるが、このように相互に転換することがある。目的としての協同が手段化したり、手段としての協同が目的化する場合である。そうであるならば、現在その協同が目的なのか手段なのか、その相互転換のどのような位置にあるのかを見極めることが極めて重要なこととなるのである。

## 協同のメリットとコスト

協同のメリットとコストについて再確認する必要がある。協同のメリッ

---

トを例示すれば次のとおりである。

- ・ 流通費や取引費用を節減することができる。
- ・ 中間利潤を節減することができる。
- ・ ボランティアを活用することができる。
- ・ 顧客起点の事業方式として「関係の経済」、「関係性構築マーケティング」を展開することができる。
- ・ ソーシャルキャピタル(信頼と連携の関係)の充実を図ることができる。

協同のメリットはこれだけではないが、これほどにも多くの重要な利点があるということを再度確認しておきたい。

ところで協同には一定のコストを必要とする。すなわち協同を実現するための努力が不可欠となる。協同のメリットとこのコストとを勘案して実際の協同が推進されるであろう。しかしこの協同のコストは費消されるものではないところに協同の特質がある。努力は消費されるものの、それにより信頼や絆が形成されるのである。

#### 協同の根本的な特質

協同の根本的な特質は、自立・独立したものの協同、自立のための協同にあり、自立と協同の相互関係、自助と相互扶助の調和にそれを求めることができる。すなわち自立性・独立性を前提とした協同ということであって、決して自立性・独立性を否定して、一体化することではない。すなわち協同の特質は「相互自助」であり、「自立協同」なのである。

そのようにみえてくると、21世紀は「相互自助」「自立協同」としての「協同の時代」であるということがいえるのではないか。それを解明し論証することが求められる。